

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

それから、ぐうちゃんがまた僕の家に戻ってきたのは、九月の新学期が始まってしばらくした頃だった。顔と手足が真っ黒になっていて、パンツ一つになると、どうしても笑いたくなくて困った。

残暑が厳しい日だった。久しぶりにぐうちゃんのほら話を聞きたいと思った。またからかわれてもいい。暑いから、今度は寒い国の話が聞きたい感じだ。

ところがぐうちゃんの話は、**A**動物のでも、暑い国の中でも、寒い国の話でもなかった。
「旅費がたまったから、これからまた外国をふらふらしてくるよ。」

ぐうちゃんは**⑦**「トツゼンそう言った。「でもまあもう少しし。にはこんな意味があったのか。ぐうちゃんはいつもと変わらずに話を続けている。それなのに、ぐうちゃんの声はどんどん遠くなっていく。気がつく、僕はぶつさらほうに言っていた。
「勝手に行けばいいじゃないか。」
ぐうちゃんは、そのときちよつと驚いた表情をした。何かを話しかけようとするぐうちゃんを残して僕は部屋を出た。

それ以来、僕は二度とぐうちゃんの部屋には行かなかった。母は、そんな僕たちに、あきれたり慌てたりしていたけれど、父は何も言わなかった。
十月の初めに、ぐうちゃんは小さな旅支度をして「いそろう」を卒業してしまった。

① 出発の日、僕は、何て言っているのかわからないうまくぐうちゃんの前立っていた。ぐうちゃんは僕に近づき、あの表情で笑った。そして、何も言わずに僕の手を握りしめ、力の籠もった強い握手をして、大股で僕の家を出ていった。

③ 「ほらばつかりだったじゃないか。」
「いそろう」がいなくなってしまうた部屋の前で、僕はそう思った。

ぐうちゃんから外国のちよつとしゃれたフウトウで僕に手紙が届いたのは、それから四か月ぐらいたってからだだった。珍しい切手がいっぱい貼ってあった。

「あのときの話の続きだ。以前若い頃に、北極まで行ってイヌイットと暮らしていたことがあるんだ。そのとき、アイスプラネットを見に行こう、と友達になったイヌイットに言われてカヌーで北極海に出た。アイスプラネット。わかるだろう。氷の惑星だ。それが北極海に本当に浮かんでいる人だけが目にできる、もう一つの宇宙なんだな、と思ったよ。地上十階建てのビルぐら

いの高さなんだ。そして、海の中の氷は、もつともつとでつかい。悠君にもいつか見てほしい。若いうちに勉強をたくさんして、いっぱい本を読んで、いっぱいおもしろいぞ。世界は、楽しいこと、悲しいこと、美しいこと、満ち満ちている。誰もが一生懸命生きている。それこそありえないほどだ。それを自分の目で確かめてほしいんだ。」

手紙には、ぐうちゃんの力強い文字が **B** 詰まっていた。
そして、フウトウからは写真が二枚出てきた。一枚は人間の倍ぐらいあるでつかいナマズの写真。もう一枚は、北極の海に浮かぶ、見た者を幸せにするという

⑥ 氷の惑星の写真だった。
(権名誠「アイスプラネット」より)

1 線 **⑦** ㊦の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。 **【知・技】**

2 線 a「ぐうちゃん」 b「九月」の名詞の種類として適当なものを一つずつ選び、記号で答えなさい。 **【知・技】**

3 線 **A** 普通名詞 **B** 固有名詞 **C** 代名詞 **D** 数詞 **E** 形式名詞 **【知・技】**

4 線 **①** 「出発の日」について、次の問いに答えなさい。 **【思・判・表】**

(1) この日、ぐうちゃんが「僕」にしたことがわかる部分を、文章中から連続した二文で抜き出し、始めと終わりの四字を書きなさい。 **【思・判・表】**

(2) (1)の動作から読み取ることができぐうちゃんの感情として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。 **【思・判・表】**

5 線 **②** 「何て言っているのかわからない」僕が、本当はぐうちゃんに言いたいことは何か。「ほら話」の一語を使って、三十字以上四十字以内で書きなさい。 **【思・判・表】**

6 線 **③** 「ほらばつかりだったじゃないか」から、「僕」のどのような様子がわかるか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。 **【思・判・表】**

7 線 **④** 「手紙」の内容から読み取れる、ぐうちゃんの人物像を次から一つ選び、記号で答えなさい。 **【思・判・表】**

8 線 **⑤** 「アイスプラネット」について、次の問いに答えなさい。 **【思・判・表】**

(2)(1) ぐうちゃんはどういうものだと感じているか。文章中から七字で抜き出して書きなさい。 **【知・技】**

9 線 **⑥** 「氷の惑星」が象徴しているものとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。 **【思・判・表】**

10 線 **⑦** 「氷の惑星」が象徴しているものとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。 **【思・判・表】**

ア 常識にとらわれて見ることができない、世界の不思議 **【思・判・表】**
イ 人間が責任をもつて守っていかなければならない、大自然の美 **【思・判・表】**
エ 大人になってもずっと心に抱いていた、純粋な少年の心 **【思・判・表】**

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

〔原文〕

1 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

2 夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも A。雨など降るも A。

3 秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへ B なり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいと A。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

4 冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

〔現代語訳〕

春は明け方。だんだんと白んでいく山ぎわが、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている(のは風情がある)。

夏は夜。月の頃は A が、闇もやはり、螢が多く飛びかっている(のがよい)。また、ほんの一、二匹ほかに光って飛んでいくのも趣がある。雨などが降るのもいい。

秋は夕暮れ。夕日が差して山の端にとても近づいた頃に、鳥がねぐらへ行くというので、三、四羽、二、三羽などと飛び急ぐことまでもしみじみとしたものを感じさせる。まして、雁などが列を作っているのが、たいそう小さく見えるのはたいへんおもしろい。日がすっかりしずんでしまつて、風の音、虫の音など(がするもの)、これもまた、言いようもない(ほど深い)。

冬は B。雪が降っているのは、言うまでもない。霜が真っ白なのも、またそうでなくても、たいそう寒いときに、火などを急いでおこして、炭を持って(廊下などを)通つていくのも、たいへん C。昼になって、(寒さが)だんだんゆるんでいくと、火桶の火が白い灰ばかりになって、好ましくない。

(第一段)

〈「枕草子」より〉

(注) 1～4は段落番号である

1 この文章の作者の名前を漢字で書きなさい。

2 線 a～dの中から、意味・用法の異なるもの一つを選び、記号で答えなさい。

3 線ア～ウを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

4 線あ～うの口語訳を書きなさい。

5 線①「うち光りて行く」、線②「つらねたる」の動作主は何か。それぞれ〔原文〕中から一字で抜き出して書きなさい。

6 A、Bにあてはまる感動を表す言葉を、それぞれ三字で書きなさい。

7 線③「はた言ふべきにあらず」とあるが、作者はどのような様子を指してこう述べているのか。二十五字以上三十五字以内で書きなさい。

8 線④「ぬるくゆるびもていけば」とあるが、「だんだんゆるんでいく」ものは何か。二字の現代語で書きなさい。

9 線⑤「わろし」とあるが、何が「わろし(好ましくない)」なのか。「好ましくない」につながるように、十五字以上二十五字以内で書きなさい。

10 次のア～ウは、どの段落について説明しているか。それぞれ1～4の段落番号で答えなさい。

【思判表】
【思判表】

ア 自然の美しさだけでなく、生活を営む人の様子にも趣深さを見出ししている。

イ 作者の感動を記した描写が、視覚的なものから聴覚的なものへと移っている。

ウ 明暗の対比を描きながら、そのどちらもがよいと述べている。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

私たちは①「気温上昇が及ぼす他の影響を検討するために「孵化して土に潜る段階」に着目した。クマゼミに限らず卵で越冬するセミは、春、気温が上がると体を作り始め、一、二か月で孵化できる状態になる。つまり、気温の上昇が近づいた近年のほうが早く孵化できる状態になる。

②「重要なのは、セミの卵がこの状態で雨を待つことだ。生まれたばかりの幼虫は、小さくて体が軟らかく、前述のとおり一時間以内に地中に潜らないと、アリに襲われたり乾燥したりして死んでしまう。そのため、土がぬかるんで軟らかくなる雨の日を狙って孵化するのだ。

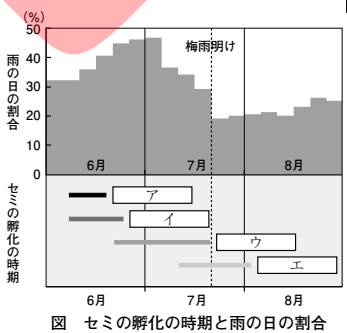
③「確実に雨を捉えるために、セミの卵は高い湿度を感知して孵化する。孵化には雨がヒッスであり、そもそも雨が降らないと、孵化できない仕組みになっているのだ。これは、孵化の時期が雨の多い梅雨に当たれば、無事に孵化できる確率が高まることを意味する。気温上昇によりセミの孵化は早まっている。A「気象庁の記録によると、過去五十年間、梅雨明けの時期は、ほとんど変わっていない。以上のことから、私たちは、次のような仮説を立てた。

「仮説」④「気温上昇で孵化が早まり、梅雨に重なったことで、孵化できる卵が増えた。

私たちは二〇〇八年、クマゼミを含む四種のセミに産卵させ、卵を野外に置いて観察した。⑤を見てほしい。他のセミは、孵化がほぼ梅雨の期間に収まっているのに対し、孵化が遅いクマゼミだけは、孵化する時期の後半に梅雨が明けてしまった。今より気温が低かった一九六〇年代には、梅雨明け後により早く孵化の準備が整い、そのまま雨に遭えずに死んでいく卵がさらに多かつたことになる。

⑥「B」気温上昇で孵化が早まり、梅雨の時期と重なったことは、クマゼミ増加の原因の一つと考えられる。ただ、梅雨の期間に孵化が終わる点では、他のセミのほうがイゼンとして有利だ。クマゼミが増えた原因ではあっても、クマゼミだけが増えた原因とはいえない。

〈沼田英治「クマゼミ増加の原因を探る」より〉



1 線⑦〜⑩の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。

2 線⑪「越冬」と同じ構成になっている熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 深山 イ 希望 ウ 遷都 エ 長短

3 A B にあてはまる言葉を次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ いっぽう ウ あるいは エ つまり

4 線①「気温上昇が及ぼす他の影響」とはどのような影響か。「〜という影響。」につながるように、十二字で抜き出して書きなさい。

5 線②「重要なのは〜待つことだ」とあるが、なぜ孵化できる状態で雨を待つことが重要なのか。「幼虫」「地中」の二語を使って、二十五字以上三十五字以内で書きなさい。

6 線③「孵化の時期が〜確率が高まる」のは、セミの卵がどのような仕組みになっているからか。文章の中から十七字で抜き出し、始めの五字を書きなさい。

7 線④「気温上昇で孵化が早まり」とあるが、このように筆者が考えたのはなぜか。「クマゼミは」という書き出しに合わせて二十五字以上三十五字以内で書きなさい。

8 線⑤「凶」について、次の問いに答えなさい。

(1) この中で、クマゼミの孵化の時期を表したものはどれか。記号で答えなさい。

(2) この図でクマゼミ以外のセミの孵化の時期を示しているのはなぜか。十五字以上二十五字以内で書きなさい。

9 線⑥「気温上昇で孵化が早まり、梅雨の時期と重なったこと」がクマゼミだけが増えた原因とはいえないのはなぜか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア クマゼミも他のセミも孵化の時期がばらばらで、孵化と気温上昇との関連性を確認できないから。

イ 気温上昇で孵化が早まった割合はクマゼミより他のセミの方が高く、クマゼミだけが早まった結果と合わないから。

ウ 孵化の時期が遅いクマゼミよりも、孵化がほぼ梅雨の期間に収まる他のセミの方が増加するには有利だから。

エ 観察した四種のセミ以外のセミについても調べないと意味がなく、確実な結果とはいえないから。

【知・技】

【知・技】

【思・判・表】

【思・判・表】

【思・判・表】

【思・判・表】

【思・判・表】

【思・判・表】

【思・判・表】

【思・判・表】

4

令6

人間のきざな

・盆土産

2 年
光 村

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

祖母は、墓地へ登る坂道の途中から絶え間なく念仏を唱えていたが、祖母の南無阿彌陀仏は、いつも『なまん、だあうち』というふうに通こえる。ところが、墓の前にしゃがんで迎え火に松の根をくべ足していたとき、祖母の『なまん、だあうち』の合間に、ふと、「えんぴフライ……。」

という言葉が混じるのを聞いた。

祖母は歯がないから、言葉はたいがいフメイリヨウだが、そのときは確かに「えんぴフライではなくえんぴフライ」という言葉ももらしたのだ。

祖母は昨夜のシヨクタクの様子を(えびのしっぽが喉につかえたことは抜きにして)祖父と母親に報告しているのだろうかと思つた。そういえば、祖父や母親は生きているうちに、えびのフライなど食つたことがあつたらうか。祖父のことは知らないが、まだ田畑を作つている頃に早死にした母親は、あんなにうまいものは一度も食わずに死んだのではなからうか——そんなことを考えているうちに、なんとなく墓を上目で見られなくなった。父親は、少し離れた崖つぶちに腰を下ろして、黙つてたばこをふかしていた。

父親が夕方の終バスで町へ出るので、独りで停留所まで送つていった。谷間はすでに日がかげつて、雑魚を釣つた川原では早くも河鹿が鳴き始めていた。村外れのつり橋を渡り終えると、父親はとつて付けたように、

「こんだ正月に帰るすけ、もつとゆつくり。」
と言つた。すると、なぜだか不意にしゃくり上げそうになつて、とつさに、

「冬だら、ドライアイスもいらねべな。」
と言つた。

「いや、そうでもななかべおん。」と、父親は首を横に振りながら言つた。「冬は汽車のチームがききすぎて、汗こ出るくらい暑いすけ。ドライアイスだら、夏どこでなくいるべおん。」

それからまた、停留所まで黙つて歩いた。バスが来ると、父親は右手でこちらの頭をわしづかみにして、

「んだら、ちゃんと留守してれな。」

と揺さぶつた。それが、いつもより少し手荒くて、それで頭が混乱した。んだら、さいなら、と言うつもりで、うっかり、

「えんぴフライ。」
と言つてしまった。

バスの乗り口の方へ歩きかけていた父親は、ちよつと驚いたように立ち止まつて、苦笑いした。

「わかつてらあに。また買つてくるすけ……。」

父親は、まだ何か言いたげだったが、男車掌が降りてきて道端に痰をはいてから、

「はい、お早かう。」

と言つた。

父親は、何も言わずに、片手でハンチングを上から押さえてバスの中へ駆け込んでいった。

「はい、発車あ。」

と、野太い声で車掌が言つた。

〈三浦哲郎「冬の雁」より〉

1 線⑦㉔の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。

2 線a「ところが」、b「とき」、c「ちよつと」の品詞名をそれぞれ漢字で書きなさい。

3 線①「えんぴフライ」を別の言葉で言い換えた部分を、文章中から九字で抜き出して書きなさい。【思判表】

4 線②「なんとなく墓を上目で見られなくなった」とき、少年はどのような気持ちだったか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。【思判表】

ア 自分だけえんぴフライを食べて、母に対して申し訳ない気持ち

イ 母が食べていないえんぴフライを食べることができて得意げな気持ち

ウ 母や祖父にえんぴフライを食べさせられなかったという悔しい気持ち

エ 母や祖父に恨まれるのではないかと恐ろしく思う気持ち

5 父と少年が別れる寂しさを表現している情景描写を一文で抜き出し、始めの五字を書きなさい。【思判表】

6 線③「不意にしゃくり上げそうに」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「しゃくり上げそうに」とあるが、これは少年のどのような状態か。「状態」につながるように十字程度で書きなさい。【思判表】

(2) 少年がそのような状態になった理由を次から二つ選び、記号で答えなさい。【思判表】

ア 父親としばらく会えないことを実感したから。【思判表】

ウ えんぴフライのことを考えていたから。【思判表】

オ 父親が言っていることが信じられなかったから。【思判表】

7 線④「いつもより少し手荒くて」とあるが、このときの父親の気持ちはどのような気持ちか。「元氣」の一語を使って、「気持ち」につながるように、二十字以上三十字以内で書きなさい。【思判表】

8 線⑤「うっかり、『えんぴフライ。』と言つてしまった」とあるが、なぜ少年はこのように言つてしまったのか。「うっかり」の一語を使って、二十五字以上三十五字以内で書きなさい。【思判表】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

妹の出発が決まると、暗幕を垂らした暗い電灯の下で、母は当時貴重品になっていたキャラコで肌着を縫って名札を付け、父はおびただしい葉書にきちょうめんな筆で自分宛ての宛名を書いた。「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい。」と言ってきた。妹は、まだ字が書けなかった。

宛名だけ書かれたかさ高な葉書の束をリュックサックに入れ、雑炊用の井を抱えて、妹は遠足にでも行くようにはしゃいで出かけていった。

一週間ほどで、初めての葉書が着いた。紙いっぱいほみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。付き添っていった人の話では、地元婦人会が赤飯やぼた餅を振る舞ってカンゲイしてくださったとかで、かぼちゃの茎まで食べていた東京に比べれば大マルにちがいはなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなっていった。情けない黒鉛筆の小マルは、ついにバツに変わった。その頃、少し離れた所に疎開していた上の妹が、下の妹に会いに行った。

下の妹は、校舎の壁に寄り掛かって梅干しの種をしゃぶっていたが、姉の姿を見ると、種をぺっと吐き出して泣いたそう。

まもなくバツの葉書も来なくなった。三月目に母が迎えに行ったとき、百日ぜきをわずらっていた妹は、しらみだらけの頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという。

妹が帰ってくる日、私と弟は家庭菜園のかぼちゃを全部収穫した。小さいのに手をつけるとシカる父も、この日は何も言わなかった。私と弟は、ひと抱えもある大物からのひらに載るうらなりまで、二十数個のかぼちゃを一列に客間に並べた。これぐらいしか妹を喜ばせる方法がなかったのだ。

夜遅く、出窓で見張っていた弟が、「帰ってきたよ!」

と叫んだ。茶の間に座っていた父は、はだして表へ飛び出した。防火用水桶の前で、やせた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た。

〈向田邦子「眠る盃」より〉

1 線ア「おびただしい」の意味として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。【知・技】

ア 高価な イ たくさんの ウ 数枚の エ 小さな

2 線イ①の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。【知・技】

3 線「はしゃいで出かけていった」を、文節と単語にそれぞれ分けて、その数を漢数字で書きなさい。【知・技】

4 線①「威勢のいい赤鉛筆の大マル」について、次の問いに答えなさい。【思・判・表】

(1) 妹の様子として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 戦争を恐れている様子 イ 疎開先での生活に満足している様子

ウ 初めて葉書を書くことを楽しんでいる様子 エ 空襲のない生活に安心している様子

(2) 対照的な表現を文章中から十一文字で抜き出して書きなさい。【思・判・表】

5 線②「東京に比べれば大マル」と言えるのはなぜか。「東京では…」疎開先では…という形で、東京と疎開先の違いを明らかにして、四十字以上五十文字以内で書きなさい。【思・判・表】

6 線③「妹が帰ってくる日」に、弟と父が妹の帰りを待ちわびていたことがわかる行動は何か。弟は九字で、父は十一文字でそれぞれ文章中から抜き出して書きなさい。【思・判・表】

7 線④「この日は何も言わなかった」とあるが、父が何も言わなかった理由として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。【思・判・表】

ア 妹を心配するあまり、かぼちゃのことなど考えていられたから

イ 小さいかぼちゃは妹の好物だったから

ウ かぼちゃ以外の食べものをたくさん用意していたから

エ 妹を喜ばせるためだったから

8 線⑤「私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た」とあるが、このとき筆者はどのような気持ちなのか。「驚く」「感動」の二語を使って、「～気持ち。」につながるように、二十文字以上三十文字以内で書きなさい。【思・判・表】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

では、モアイを作った文明は、いったいどうなったのだろうか。

かつて島が豊かなヤシの森に覆われていた時代には、土地も肥え、バナナやタロイモなどの食料も豊富だった。しかし、森が消滅するとともに、豊かな表層土壌が雨によって侵食され、流失してしまった。火山島はただでさえ岩だらけだ。その島において、表層土壌が流失してしまうと、もう主食のバナナやタロイモをサイバイすることは困難となる。おまけに木がなくなっただけでなく、魚を捕ることもできなくなった。

こうして、イースター島はしだいに食料危機に直面していくことになった。その過程で、イースター島の部族間の抗争も頻発した。そのときに倒され破壊されたモアイ像も多くあったと考えられている。そのような経過をたどり、イースター島の文明は崩壊してしまった。モアイも作られることはなくなった。文明を崩壊させた根本的原因是、森の消滅にあったのだ。千体以上のモアイの巨像を作り続けた文明は、十七世紀後半から十八世紀前半に崩壊したと推定されている。イースター島のこのような運命は、私たちにも無縁なことではない。

日本列島において文明が長く繁栄してきた背景にも、国土の七十パーセント近くが森で覆われているということが深く関わっている。日本列島だけではない。地球そのものが、森によって支えられているという面もある。森林は、文明を守る生命線なのである。

現代の私たちは、地球始まって以来の異常な人口爆発の中で生きている。一九五〇年代に二十五億足らずだった地球の人口は、半世紀もたたないうちに、その二倍の五十億を突破してしまった。イースター島の急激な人口の増加は、百年に二倍の割合であったから、いかに現代という時代が異常な時代であるかが理解できよう。

このまま人口の増加が続いていけば、二〇三〇年には八十億を軽く突破し、二〇五〇年には九十億を超えるだろうと予測される。しかし、地球の農耕地はどれほど耕しても二十一億ヘクタールが限界である。そして、二十一億ヘクタールの農耕地で生活できる地球の人口は、八十億がぎりぎりである。食料生産に関しての革命的な技術革新がない限り、地球の人口が八十億を超えたとき、食料不足や資源の不足がコウジヨウ化する危険性は大きい。

絶海の孤島のイースター島では、森林資源が枯渇し、島の住民が飢餓に直面したとき、どこからも食料を運んでくることができなかった。地球も同じである。広大な宇宙という漆黒の海にぽっかりと浮かぶ青い生命の島、地球。その森を破壊し尽くしたとき、その先に待っているのはイースター島と同じ飢餓地獄である。とするならば、私たちは、今あるこの有限の資源をできるだけ効率よく、長期にわたって利用する方策を考えなければならぬ。それが、人類の生き延びる道なのである。

〈安田喜憲「モアイは語る―地球の未来」より〉

1 線ア～エの漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。

2 線a「かつて」c「その」の品詞名を漢字で書きなさい。

3 線b「困難」d「有限」の対義語を漢字で書きなさい。

4 線①「イースター島の文明は崩壊してしまった」とあるが、イースター島の文明が崩壊した根本的原因を文中から抜き出して書きなさい。

5 線②「イースター島のこのような運命は、私たちにも無縁なことではない。」とあるが、この一文の文章中における役割を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 話題をイースター島から地球に切り替えている。 イ 話題をイースター島からモアイに切り替えている。
ウ 話題に人類の軌跡を付け足している。 エ 話題に地球の存在意義を付け足している。

6 筆者は森林の大切さをどのような言葉で表現しているか。文章中から八字で抜き出して書きなさい。【思判表】

7 線③「いかに現代という時代が異常な時代であるか」について、次の問いに答えなさい。【思判表】

(1) どのような現象を指して異常と述べているのか。文章中から四字で抜き出して書きなさい。

(2) この現象が、なぜ異常といえるのか。「イースター島」「地球」「半世紀」の三語を使って、五十字以上六十字以内で書きなさい。【思判表】

8 線④「地球も同じである」とあるが、どのような点がイースター島と同じであるか。「枯渇」「食料」の二語を使って、「～という点。」につながるように、三十字以上四十字以内で書きなさい。【思判表】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

〔原文〕

与一、かぶらを取つてつがひ、よつぴいてひやうど放つ。小兵といふぢやう、十二東三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬしづみぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおほしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、

④「御定ぞ、つかまつれ。」

⑤と言ひければ、今度は中差取つてうちくはせ、よつぴいて、しや頸の骨をひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。Aの方には音もせず、Bの方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。

「あ、射たり。」

⑥と言ふ人もあり、また、

「情けなし。」

と言ふ者もあり。

〔現代語訳〕

与一は、かぶら矢を取つてつがえ、十分に引き絞つてひようと放つた。小兵とはいいなながら、矢は十二東三伏で、弓は強い、かぶら矢は、浦一帯に鳴り響くほど長いうなりを立てて、あやまたず扇の要から一寸ほど離れた所をひいふつと射切つた。かぶら矢は飛んで海へ落ち、扇は空へと舞い上がった。しばしの間空に舞っていたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつと散り落ちた。夕日に輝く白い波の上に、金の日輪を描いた真つ赤な扇が漂つて、浮きつしづみつ揺れているのを、沖では平家が、舟端をたたいて感嘆し、陸では源氏が、えびらをたたいてはやし立てた。

あまりのおもしろさに、感に堪えなかつたのであろう、舟の中から、年の頃五十歳ばかり、黒革おどしの鎧を着、白柄の長刀を持った男が、扇の立ててあつた所に立つて舞を舞つた。そのとき、伊勢三郎義盛が、那須与一の後ろへ馬を歩ませてきて、

「御定であるぞ、射よ。」

と命じたので、今度は中差を取つてしっかりと弓につがえ、十分に引き絞つて、男の頸の骨をひやうふつと射て、舟底へ真つ逆さまに射倒した。A方は静まりかえつて音もしない、B方は今度もえびらをたたいてどつと歓声を上げた。

「ああ、よく射た。」

⑥と言ふ人もあり、また、

「心ないことを。」

と言ふ者もあつた。

〔平家物語〕より〕

- 1 「平家物語」が成立した時代とそのジャンルをそれぞれ漢字で書きなさい。 【知・技】
- 2 〓線ア～ウを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。 【知・技】
- 3 〓線a～dの「の」の中から、意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。 【知・技】
- 4 〓線①「ひやうど」は擬音語であるが、これ以外の擬音語を〔現代語訳〕から二つ探して書きなさい。 【思・判・表】
- 5 〓線②「沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり」とあるが、平家の武士たちはどのような気持ちだったのか。「与一」「腕前」の二語を使って、二十字以上三十字以内で書きなさい。 【思・判・表】
- 6 〓線③「おもしろさ」とあるが、何がおもしろかったのか。「誰」が「こと」という形で書きなさい。 【思・判・表】
- 7 〓線④「御定」とは、何をどうしろという命令か。「〜という命令。」につながるように、十字程度で書きなさい。 【思・判・表】
- 8 〓線⑤「言ひければ」の動作主を〔原文〕から抜き出して書きなさい。 【思・判・表】
- 9 〓線A・Bにあてはまる言葉を、文章中からそれぞれ二字で抜き出して書きなさい。 【思・判・表】
- 10 〓線⑥「情けなし」と言った者は、どのような行動に対して「心ない」と言っているのか。「感動」「非情」の二語を使って、二十字以上三十字以内で書きなさい。 【思・判・表】

一、次の漢詩を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

絶句

杜甫

〔書き下し文〕

江は碧にして鳥は逾よ白く
山は青くして花は然えんと欲す
今春看す又過ぐ
何れの日か是れ帰年ならん

〔訓読文〕

江碧鳥逾白
山青花欲然
今春看又過
何日是帰年

1 この漢詩の形式を漢字四字で書きなさい。【知・技】

2 線①「江」、②「鳥」と対になる言葉を、「訓読文」の中からそれぞれ一字で抜き出して書きなさい。【思・判・表】

3 線③「花欲然」とあるが、「書き下し文」の読み方になるように送り仮名と返り点をつけなさい。【知・技】

4 この漢詩の前半で色を表す言葉はどれか。〔訓読文〕の中から四つ、漢字一字で抜き出して書きなさい。【思・判・表】

5 線④「今春看す又過ぐ」に込められた作者の心情を次から一つ選び、記号で答えなさい。【思・判・表】
ア 美しい春があつという間に過ぎていくことへのなげき
イ 今年も故郷の春を見られないまま過ぎていくむなしさ
ウ 今年も好きな季節の春が終わったことへの名残惜しさ
エ さまざまに移り変わっていく自然の姿に対する驚き

6 線⑤「何日是帰年」を現代語訳して書きなさい。【思・判・表】

7 前半に美しい風景を描くことで、どのような効果が生まれているか。「景色」「悲しみ」「作者」の三語を使って、「効果。」につながるように、二十五字以上三十五字以内で書きなさい。【思・判・表】

二、次の漢詩を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

李白

〔書き下し文〕

故人西のかた黄鶴楼を辞し

孤帆の遠影碧空に尽き

唯だ見る長江の天際に流るるを

〔訓読文〕

故人西辞黄鶴楼
烟花三月下揚州
孤帆遠影碧空尽
唯見長江天際流

〈石川忠久「漢詩の風景」より〉

1 この漢詩の形式を漢字四字で書きなさい。【知・技】

2 承句を書き下し文に直しなさい。【知・技】

3 線①「送る」とあるが、作者はどこから故人を見送っているか。〔書き下し文〕から抜き出して書きなさい。【思・判・表】

4 線②「辞し」の意味を次から一つ選び、記号で答えなさい。【思・判・表】
ア 友を避けて
イ 合格を辞退して
ウ 別れを告げて
エ 仕事を辞めて

5 線③「故人」について、次の問いに答えなさい。【知・技】

6 転句で対照的に描かれている二つのものを〔書き下し文〕の中からそれぞれ二字で抜き出して書きなさい。【思・判・表】

7 線④「唯見長江天際流」とあるが、ここでは倒置が使われている。これを普通の語順に直して、書き下し文で書きなさい。【思・判・表】

8 この詩には作者のどのような気持ちが表されているか。「孟浩然」「別れ」の二語を使って、二十字以上三十字以内で書きなさい。【思・判・表】

・君は「最後の晚餐」を知っているか

2 年 光 村

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問題では、句読点、記号も一字と数えなさい。)

レオナルドは、どうしてこんなにうまく、いろいろな手を描くことができたのだろうか。実は、彼は人体の解剖を通して骨格や筋肉の研究をし、人の体がどのような仕組みでできているかを知り尽くしていた。だから、手だけでなく顔の表情や容姿も、一人一人の心の内面までもえぐるように描くことができた。

さらに注目してほしいのは、ここに描かれている室内の壁や天井だ。壁のタピスリーや天井の格子模様を見てみよう。壁がだんだん狭くなって、タピスリーも奥にいくほど小さくなる。これが遠近法だ。レオナルドは、絵画の遠近法を探究し、それをこの絵で完成させた。この絵には、遠くのものも小さく見えるという遠近法の原理が使われている。室内の空間を、遠くにいくにつれて小さく描くことで、部屋に奥行きが感じられるようになる。

遠近法には、さらに別の効果もある。壁のタピスリーや天井の格子など、奥に向かって狭まっていく線を延ばしていくと、その線は一つの点に集まる。これを遠近法の消失点というが、なんと、その点の位置が、キリストの額なのだ。これにより、絵を見る人の視線は自然とキリストに集まっていく。この絵の主人公は、遠キリスト。誰が見ても、そう思わせる効果がある。遠近法という絵画の技法が、そこに描かれた人物たちの物語を、ドラマチックに演出している。これは、描かれた絵が偶然そうなったということではない。レオナルドは、明らかに計算をしてこの絵を描いたのだ。その証拠に、キリストの右のこめかみには、くぎの穴の跡がある。このくぎから糸を張って、あちこちに延ばし、画面の構図を決めていったのだ。まるで設計図のような絵ともいえる。

長にあるようにすら見える。このように、遠近法や光の明暗の効果を合わせて用いることで、絵に描かれているのが本物の部屋であるように見えてくる。だから、かつての修道士たちのように、こんな部屋で食事をしたら、まるでキリストたちといっしょに晚餐をしているような気持ちになるにちがいない。

解剖学、遠近法、明暗法。そのような絵画の科学が、それまで誰も描かなかった新しい絵を生み出した。レオナルドが究めた絵画の科学と、そのあらゆる可能性を目的にできること。これが、「最後の晚餐」を「かっこいい」と思わせる一つの要因だろう。

ただ、残念なことに、この絵は描かれてから五百年もたつて、今では絵の具が剥げ落ち、ぼろぼろになってしまった。そこで、絵の修復が行われた。

「最後の晚餐」の修復が終了したのは、一九九九年五月のことだ。それまでかびやほりで薄汚れて、暗い印象のあった絵から、鮮やかな色彩がよみがえった。しかし、絵の細かいところはわからない。レオナルドが描いた細部は、既に剥がれ落ちて、消えてなくなっていた。修復の作業は、あくまで汚れを落とすことと、現状の絵をそのままに保護することだけだ。だから修復された絵には、もう細かい描写はない。今、私たちが見ることができているのは、そんな「最後の晚餐」である。

B、実際に修復を終えた「最後の晚餐」の前に立って、その絵を眺めると、文句がないほどに魅力的なのだ。確かに細部は落ちて、消えてなくなっている。しかし、そのためにかえって、絵の「全体」がよく見えるようになった。人物のリンカクが作る形。その連なり。絵の構図がもっている画家の意図。つまり、レオナルドが、絵画の科学を駆使して表現しようとしたものが、とてもよく見えてくる。だから、いきなり「かっこいい」と思えるのだ。

〈布施英利「君は『最後の晚餐』を知っているか」より〉

1 線 **A**、**B** の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。 【知・技】

2 線 **A**、**B** にあてはまる言葉を次から一つずつ選び、記号で答えなさい。 【思・判・表】

3 線 **A**、**B** の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。 【思・判・表】

4 線 **A**、**B** の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。 【思・判・表】

5 線 **A**、**B** の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。 【思・判・表】

6 線 **A**、**B** の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。 【思・判・表】

7 線 **A**、**B** の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に直しなさい。 【思・判・表】

ア 長文の間に短文を差し込むことで、リズムを整えている。 【思・判・表】

イ 読者に問いかけることで、筆者の意見を主張している。 【思・判・表】

エ 読者に身近な言葉を使うことで、強く印象付けている。 【思・判・表】

オ 「最後の晚餐」は食堂に描かれているが、食事のマナーを示すために作られた。 【思・判・表】

ア この文章について述べた文として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。 【思・判・表】

イ レオナルドは医師であり、解剖学の知識を趣味の一つであった絵画に生かしていた。 【思・判・表】

エ 遠近法には絵を見る人の意識を描かれている人物一人一人に分散させる効果がある。 【思・判・表】

オ 「最後の晚餐」は食堂に描かれているが、食事のマナーを示すために作られた。 【思・判・表】

	② × 3	⑥ × 1	③ × 1	⑥ × 1	② × 4	③ × 3	② × 3	③ × 2		
	10 思	9 思	8 思	7 思	6 思	5 思	4 知	3 知	2 知	1 知
ア					A	①	う	あ	ア	
段落	15									
イ							い			
段落					B	②				
ウ							う			
段落	25									
	好ましくない。									
				25						

令6
 枕まくら
 草くさ
 子こ
 2年組番氏名

観点別
知・技
/21
思・判・表
/29

得点

※無断で複写・複製をすることは禁じます。

※無断で複写・複製をすることを禁じます。

⑤ × 1		④ × 3		⑤ × 1		④ × 2		④ × 2		② × 4		④ × 1	
8 思		7 思		6 思		5 思		4 思		3 知		2 知	
		父 弟				(2) 思 (1) 思		文節		エ イ			
20				40						え			
								単語		オ ウ			
30				50						んだ		る	
気持ち。													

観点別
知・技
/20
思・判・表
/30

得点

※無断で複写・複製をすることは禁じます。

二								一																					
④ × 1		③ × 3			③ × 1	③ × 2		③ × 2		④ × 1		③ × 3			③ × 1	③ × 1	③ × 1												
8	思	7	思	6	思	5	4	思	3	思	2	知	1	知	7	思	6	思	5	思	4	思	3	知	2	思	1	知	
					(2) 思	(1) 知																			①				
20																													

②×3	⑥×1		③×1	⑥×1			②×4		③×3		②×3	③×2	
10 ^思	9 ^思		8 ^思	7 ^思			6 ^思	5 ^思	4 ^知		3 ^知	2 ^知	1 ^知
ア	か	(例)昼	(例)気	る	風	(例)日	A	①	う	あ	ア		
4 段落	り	に	温	様	の	が	を				よう	b	清少納言 (漢字指定)
	に	な		子	音	沈			(例) 似つかわしい	(例) いうまでもない	よう		
	な	り		。	や	ん	か	螢			う		
イ	る	、			虫	で					①		
3 段落	こ	火			の	し	し					ち	
	と	桶			音	ま	B	②		い	こ		
ウ	が	の			が	っ	あ				う		
2 段落		火		35	聞	た					ひ		
		が			こ	あ	は	雁		(例) 早朝	お		
	25	白			え	と	れ				け		
	好ましくない。	い			て	に							
		灰			て	に							
		ば			く	、							

(採点基準)

976

古典的仮名遣いでなければ不可。
 文末が「〜様子」でなければ一点減点。
 「何がどのように変化することが好ましくないかが述べられていなければ不可。
 『好ましくない』につながる形でなければ不可。

	④ × 3		⑤ × 1			④ × 1	⑤ × 1		④ × 3		④ × 1	② × 4		
9 ⑧	8		7 ⑧			6 ⑧	5 ⑧		4 ⑧	3 ⑧	2 知	1 知		
ウ	(2) ⑧		(1) ⑧		に	め	雨	。	以	(例)生	早	A	ウ	ア
	る	(例)ク	エ	な	、	クマゼミは	が	内	ま	く	ウ	あ	ね	
	時	マ		る	一	(例)気	降	に	れ	孵				
	期	ゼ		か	、	(例)温	ら	地	た	化				イ
	を	ミ		ら	二	温	な	中	ば	で				
	比	と		。	か	が		に	か	き				
	べ	他			月	上		潜	り	る				
	る	の		35	で	が		る	の	状				
	た	セ			孵	る		必	幼	態				
	め	ミ			化	と		要	虫	に				
。	の			で	体		が	は	な					
	孵		き	を		あ	、	る						
25	化		る	作		る	一	という影響。						
	す		25	状		た	時							
				態		め	間							
									B		エ	イ		
									工		依	必		
											然	須		

(採点基準) 5 「幼虫」「地中」の二語がなければ不可。理由を述べる文末表現でなければ二点減点。
7・8(2) 理由を述べる文末表現でなければ二点減点。

令6

盆
土
産

2年

組

番

氏名

※無断で複写・複製をいかに禁じます。

得点

⑥ × 2			④ × 6			② × 7					
8 思			6 思			2 知					
7 思			5 思			1 知					
し	手	(例)父	元	(例)ま	(2) 思	(1) 思	谷	あ	a	ウ	ア
た	荒	と	気	た	(例)涙	間	は	ん	接続詞 (漢字指定)	か じ か	不 明 瞭
か	く	の	で	し	が	込	す	な			
ら	頭	別	い	ば	み	ア	で	に	b	名詞 (漢字指定)	み ち ば た
。	を	れ	て	ら	上	げ	う	ま			
	揺	が	ほ	く	る	よ	い	も	エ	イ	食 卓
	さ	つ	し	会	う	な	の				
	ぶ	ら	い	え	な				c	副詞 (漢字指定)	食 卓
	ら	い	と	な							
35	れ	と	い	い	工	10					
	て	き	う	息	(順不同)	状態。					
	混	に		子							
	乱	、		に							

(採点基準) 6 (1) 「状態」につながる形でなければ不可。

7 「元気」の一語がなければ不可。「気持ち」につながる形でなければ不可。

8 「つらい」の一語がなければ不可。理由を述べる文末表現でなければ二点減点。

君は「最後の晩餐」を知っているか

2年組

番号氏名

得点

※無断で複写・複製をいふことを禁じます。

③×2	⑦ × 1		③×1	⑥ × 1		④ × 1		③ × 2		③×2	③ × 4	
7 <small>思</small>	6			5 <small>思</small>		4		3 <small>思</small>		2 <small>思</small>	1 <small>知</small>	
ア	(2)		(1) <small>思</small>	細	(例)鮮	(2) <small>思</small>		(1) <small>思</small>	ま	A	ウ	ア
	え	し	(例)レ	か	や	の	(例)遠		る	エ	合	かいぼう
	て	て	オ	い	か	額	近		で			
	く	表	ナ	描	な	だ	法		設			
	る	現	ル	写	色	か	の	イ	計			
	35	し	ド	20	彩	ら	消		図			
	ら	よ	が	は	は	。	失		の			
	。	う	、	失	よ		わ		よ			
		と	絵	わ	み		れ		う			
		し	画	た	が		え		な			
	た	の	絵	え	25	っ		絵				
エ		も	科	。	た	が		キ	ア	輪	ようぼう	
		の	学		た	が		リ				
		が	を		が		ス					
		、	駆				ト					
		見	使									
	45											

(採点基準) 4(2)「消失点」「額」の二語がなければ不可。理由を述べる文末表現でなければ二点減点。

5 「色彩」「細かい」の二語がなければ不可。文末が「絵」でなければ二点減点。

6(2) 「科学」の一語がなければ不可。理由を述べる文末表現でなければ二点減点。

(順不同)

令6
走れメロス
2年組番名
氏名
得点

※無断で複写・複製をいふことを禁じます。

⑥ × 1			④ × 2		② × 2		④ × 3			② × 3		② × 7											
11			10 ^思		9 ^思		8 ^思			7 ^思		6 ^思		5 ^思			4 ^思		3 ^知		2 ^知		1 ^知
に	て	(例)ニ	始め	顔	①	な	(例)メ	悪	A	a	ウ	ア	動	妄	けいり	太	幸	治	(漢字指定)				
な	、	人	信	を	抱	い	口	い															
っ	王	の	実	赤	き	か	ス	夢	ア														
た	が	友	と	ら	合	と	が	を	エ														
こ	人	情	は	め	い	い	こ	見	B				詞	想									
と	を	を	す	て	②	う	う	た					(漢字指定)										
。	信	目	か	つ	れ	こ	こ	に	エ	b	エ	イ											
	じ	の	っ	た	し	と	来	ない															
35	ら	当	た	。	泣	。	ない	の	C				副	裸	ほうよう								
	れ	た			き		い	で					詞	体									
	る	り	(完答)				の	は	イ				(漢字指定)										
	よ	に																					
	う	し																					
	25																						

(採点基準)

11 「友情」「信じる」(活用可)の二語がなければ二点減点。
 7 文末が「こと」でなければ二点減点。
 35
 25